九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

AI 時代における文学倫理学批評 ： 倫理身分を視点として

任, 潔
浙江大学外国語学院 ： 副研究員

https://hdl.handle.net/2324/7318870

出版情報：九大日文. 44, pp.2-12, 2024-10-01. Association of Japanese Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

AI時代における文学倫理学批評

――倫理身分を視点として――

任潔（REN Jie）

文学倫理学批評は、西洋の倫理批評と中国の道徳批評を参考にして提唱された文学批評理論および方法であるが、西洋の倫理批評と異なる点をいくつか持っている[1]。文学批評の方法としての文学倫理学批評は、倫理的観点から、文学の倫理的性質と教育的機能を強調し、これに基づいて文学作品に描かれるさまざまな生活現象を分析することに重点を置く。文学倫理学批評は、倫理選択[2]を基礎理論とした「人類文明三段階論」という先駆的な概念を提出したのみならず、倫理学、心理学、哲学、言語学、社会学、歴史学、人類学および自然科学（生命科学、脳科学など）の研究成果を多く取り入れて、倫理身分（ethical identity）、倫理選択（ethical choice/ethical selection）、倫理環境（ethical environment）、スフィンクス・ファクター（Sphinx factor）、自由意志（free will）、理性意志（rational will）、倫理タブー（ethical taboo）などの用語を中心に、自らの理論システムおよび言語システムを構築した。

倫理身分は、文学倫理学批評の中心的な用語の一つであり、西洋の形而上学的な哲学の伝統における「人格の同一性」や、西洋の文化研究における「アイデンティティ」などの概念と異なっている。文学倫理学批評の理論的枠組みの中で、倫理身分には、次のような基本的な意味合いが含まれている。①倫理身分は社会における個人の存在を識別するものであり、身分によって与えられる責任と義務を指す。②倫理身分はその起源から見ると、二つのタイプに分類できる。一つは生まれつきの、血縁によって決定される血縁身分であり、もう一つは後天的なもので、例えば夫と妻の身分などである。③根本的にいえば、人間の身分は倫理選択の結果である。自然選択[3]は〈人間〉という形式上の問題を解決し、形式から人間を獣から区別させるものである。それだけでなく、責任、義務、道徳の観点から人間の身分を確認するものでもある。④倫理身分は、倫理的秩序を維持するための基礎であるほか、倫理選択の前提および基本をなしており、倫理選択の結果でもある。身分は、選択によって構築されるが、選択によって解体されることもある。

一、「Who am I」から「I am human」へ

「私とは何者か」という問いは、西洋哲学の分野において古くから議論されてきた命題である。人格の同一性に関する西洋の哲学的議論では、形而上学的な動機から、主に①時間の経過とともに進化や変化を遂げたものは、その同一性を維持できるか、②変化するものや連続的でないものも、時間を超えてその同一性を持ち得るか、の問題が論じられてきた[4]。二十世紀末

以降、特に近年において、同一性に関する哲学的研究は、価値論、規範性、人生哲学の動機と統合されるようになり、人間の生の意味や道徳的実践との関係性が問われるようになった。いわゆる「実践的転回」と呼ばれる傾向を示している。しかし、その根本的な問いは依然として、人間が時間という次元において、持続性と同一性を持ち続けることができるかどうかという問題である。「私とは何者か」という古い命題への探求にあたり、西洋哲学の系譜は今でも、同一性の視点から抜け出していないと言える。

文学倫理学批評でも、「私とは何者か」の問題が論じられている。文学倫理学批評は、本質主義、合理性、記憶などに基づいて答えようとする諸主張を否定するわけではない。しかし、「私とは何者か」を検討する前に、まず「私」という主体に焦点を当てる必要があるのではないかというのは、文学倫理学批評の主張である。「私とは何者か」という問いよりも前に、「私は人間である」という前提条件が予め設定されているはずである。「人間」は人間の第一身分であり、「人間」という身分を獲得して初めて、人々は身分の問題について深く考えはじめるからである。「私は人間である」という命題を証明するために、まず答えなければならないのは「人間とは何か」ということである。文明の発展の中で、人間は自らを獣と比較しながら、「人間とは何か」を形式と本質の両面から判断してきた。文学倫理学批評は、「自然選択」と「倫理選択」の概念を提示し、人間の形式と本質にかかわる問題を明らかにしようとする。

「自然淘汰」は、生物進化のメカニズムとしてダーウィンが提唱した理論であり、生存競争における適者生存の自然現象を指す。一方、文学倫理学批評が論じる自然淘汰（＝自然選択）や進化は、生物界全体に適用するのではなく、人間という生物の進化にのみ適用するものである。人間の場合、進化の目的は〈人間〉という形式を獲得することにあり、それによって他の動物と形式的に区別される。進化の最終形態（例えば、顔の特徴、四肢の機能、発声器官の発達など）は予め定められたものではなく、自然淘汰の結果である。類人猿から人間への移行は、進化の過程で人間が行った最初の選択、すなわち「自然選択」である。しかしながら、自然選択は「人間とは何か」という問題、すなわち人間と他の動物との本質的な違いを根本的に解決したわけではない。そのため、自然選択が完了した後も、人間には第二の選択、すなわち「倫理選択」を行う必要がある。倫理選択によって初めて、人間は他の動物と本質的に区別されるのである。

「倫理選択」の概念は、「人間とは何か」という問いを根本から答えようとするものであり、人間と他の動物との本質的な違いは、人間が倫理意識を持っていることにあるのだと主張する。ギリシャの古代神話では、人間は人の顔をするスフィンクスとして描かれ、中国の古代神話では、人間は人の顔と蛇の体を持つ女・として描かれている。古代人は人間の基本的な特徴について、「人間は半人半獣である」つまりスフィンクス・ファクターである、というシンプルな表現で理解していたことがわかる。スフィンクス・ファクターは倫理選択などの概念と同様、

文学倫理学批評における重要な用語であり、ヒューマン・ファクター（human factor）とアニマル・ファクター（animal factor）[5]によって構成される。スフィンクス・ファクターの存在により、自然選択を終えた人間は、「人間であるか獣であるか」を選択しなければならない立場に常に置かれている。その選択こそ倫理選択なのである。人間になりたい衝動はヒューマン・ファクターから生じ、動物になりたい衝動はアニマル・ファクターから生じる。アニマル・ファクターは、古代の類人猿が人間に進化した後の動物性の残留であり、「動物になる」という意志は人間の本能的な反応である。一方、ヒューマン・ファクターは合理的な意志に変化して人に作用し、人を人間らしく導く力となる。アニマル・ファクターがヒューマン・ファクターによって抑制されるとき、人間は正しい倫理選択をするようになり、その結果、自覚的な人間となる。

以上述べてきた通り、文学倫理学批評の理論的枠組みの中で、「私とは何者か」つまり身分への問いかけは、実際には「人間とは何か」「私は人間なのか」「人間としてどうすべきか」（How to Be Human）など、一連の質問に関係している。意識の面では、人間は形式と本質の両方で自分と他の動物の違いを認識する必要があり、実践の面では、人間はまず自然選択を通して類人猿から人間への進化を受け入れて、人間の本質を獲得する必要がある。〈人間〉という第一の身分を獲得するには、人間は誕生から死に至るまでの長い過程を経なければならない。それこそ、「人生」というものなのである。

二、倫理身分の構築・脱構築と倫理選択

人間は自然選択によって第一の身分を形式的に獲得し、倫理選択によってそれを倫理的に獲得する。倫理選択の段階にいる人間は、血縁に基づく身分、倫理関係に基づく身分、道徳規範に基づく身分、集団的および社会的関係に基づく身分、職業に基づく身分など、さまざまな実践的な身分を持っている。人間は常に一定の倫理環境の中で生きており、その倫理環境は身分に強い影響を与えるため、人間の身分は本質的には倫理身分とも言える。文学倫理学批評は身分の倫理性を重視し、社会と倫理を基準として、社会における身分主体の位置や、身分によって与えられる責任と義務などを明らかにすることに努めている。

文学倫理学批評は、倫理身分は社会・歴史の発展の客観的な産物であり、人間の意志から独立して客観的属性を持っていると主張する。身分はある意味で規範でもあり、人々に行動の理由を提供すると同時に、責任と義務を規定してもいる。この客観性は、倫理秩序が維持できる基本的な条件である。ある身分を獲得すると、人間はその身分と対応する責任や義務を負わなければならなくなる。責任や義務は、倫理秩序や伝統によって制限されているため、個人の意志に決定されるものでも、個人の感情に影響されるものでもない。たとえば、初期の人間社会の倫理タブーは、人間の合理的意識による最小限の道徳である。

自分の倫理身分を認めなくても、個人は身分に基づいて行動しなければならない。倫理身分を無視して行動するとタブー違反と見なされ、処罰されることになる。要するに、人間は身分なしでは存在できない、ということである。

文学倫理学批評では、倫理身分の主観的属性も強調されている。まず、倫理身分は個人の存在を前提としており、個人が倫理身分に応じて行動するかどうかは、個人の意志による自律に委ねられている。自律は理性から生まれ、理性的意志に外化される。理性的意志は倫理規範を基準として自由意志を制約し、個人に倫理身分にふさわしい倫理選択をさせる。理性を得るための基本的な方法として、倫理的教誨（ethical teaching）が必要となる。そして教誨を得るための基本的な手段は文学である。つぎに、人間は身分の主体として倫理身分を認識し、それを構築・脱構築する主観的能動性を持っている。個人が自らの身分を認めれば、倫理タブーは、理性化された結果としての倫理規範に従うことが可能になる。もし個人が、ある倫理身分を持っていないがそれを認めている場合、能動的にその身分を獲得することは可能である。逆の場合、その身分を能動的に構築しないか、すでに持っている身分を脱構築することも可能である。

人間は倫理身分を構築しあるいは脱構築しようとする能動性を持っているが、その能動的な構築や脱構築が必ずしも成功を目指すわけではないし、構築・脱構築された身分が必ずしも合理的身分であるわけでもない。なぜなら、身分の構築も脱構築も、具体的な倫理選択によってなされるものであり、身分が合理的かどうかを判断するポイントは、その人が合理的な倫理選択をしているかどうかにあるからである。それと同時に、倫理選択には必ず意志が関与しており、これも倫理身分の主観的性質を証明している。社会生活は複雑で多面的であり、人間は常に複数の倫理関係にあって、複数の倫理身分を持っている。身分の構築と脱構築は、倫理的問題（たとえば倫理的ジレンマや倫理的パラドックスなど）を解決する重要な手段にも、新たな倫理的問題を発見するきっかけにもなり得る。

三、人物・作家・読者の倫理身分

人間社会における倫理問題は、ほとんど身分と関係している。それと同様に、中国文学と日本文学を含む世界文学における倫理的問題も、登場人物の身分と深く結びついている。倫理身分の変化は、倫理混乱（ethical confusion）や秩序の再構築（reconstruction of ethical order）などをもたらす可能性がある。文学倫理学批評は、作品における人物の倫理身分とその分析に焦点を当てており、身分の所有者がどのように自らの行動を規制し、どのような倫理選択によって身分を獲得あるいは変更するかを分析する。人物の身分に対する分析を補助線とすることで、より全面的に人物の倫理選択の契機、過程と結果を得ることができ、また文学から倫理的啓示などを得ることもできると考えられる。

文学倫理学批評は倫理的観点から、作品における登場人物の身分を考察することを重視するだけでなく、倫理身分の観点か

ら、〈作者／書くこと〉〈読者／読むこと（あるいは批評すること）〉の関係を研究することにも注目している。作者には作者としての身分＝「作者身分」があり、読者には読者としての身分＝「読者身分」がある。特定の倫理的環境においては、作者の「作者身分」と読者の「読者身分」が、彼らの持ち得る権力と果たすべき責任・義務を制限している。作者には創作・虚構の自由があり、読者には読書・批評の自由があるが、その創作活動も読書（批評）活動も、「作者」「読者」の身分によって付与される倫理規範に反することはできない。一方、人間社会に生きている作者と読者は、他の身分も持っている。それらの身分は、「作者」「読者」の身分と相互作用し、作者の創作活動や読者の読書（批評）活動に影響を与える。作者の身分と作者の創作活動との関係に関しては、文学倫理学批評は主に、①作者の身分に対する認識・選択・構築・脱構築と作者の倫理意識・道徳立場との関係、②作者の倫理身分が作品における倫理的描写や登場人物の造形に与える影響、③作家の倫理身分と作品に表現される倫理的傾向との関係、などの問題に注目している。読者の身分と読者の読書活動との関係に関しては、文学倫理学批評は主に、①読者の身分に対する認識・選択・構築・脱構築と読者の倫理概念・道徳立場との関係、②読者の倫理身分が読書活動に与える影響、③読者の倫理身分と作品の倫理的意義の構築、などに注目している。

作者も読者も必ず倫理身分を持っている。作者が創作に着手する前に、あるいは読者が読書（批評）に着手する前に、それぞれの倫理的立場はすでに用意されている。作者の立場からすれば、創作は読者や作品に対する「支配」につながるかもしれないし、読者の立場からすれば、読書（批評）が作者や作品に対する「支配」につながるかもしれない。しかし、創作にせよ読書（批評）にせよ、それに先立つ作者・読者の主観あるいは先入観の完全排除は不可能である。むしろ、倫理身分から生じた倫理的立場こそ、文学創作と読書（批評）に不可欠な、合理的な前提条件を構成しているのである。問題の中心は、いかに作者・読者の主観的立場をなくすかではなく、その立場とテキストとの関係をどう理解すべきか、作者・テキスト・読者・文脈といった要素の相互作用の中で、どのように両者の合理的な交流を実現させるかにある。そのほか、文学の倫理的価値をいかに向上させるか、あるいは教化的役割を発揮させるかも、重要な問題となる。

近年、人工知能技術（ＡＩ）の急速な発展とともに、新たな文学ジャンルとしてＡＩ文学が登場した。ＡＩ文学の誕生は必然的に、文学の形式と内容、作者と作品、読書行為とメディア、理論と批評など、文学の根幹に関わる問題の再考や議論を引き起こすだろう。さらに、従来の文学観念の変化や、文学理論システムの再構築の必要性も迫ってくるだろう。ＡＩ文学の登場に伴い、ＡＩ文学に「作者」が存在するのか、「作者」は誰になるのかなどの問題は重要視されるようになった。もし「作者」の不在が認められれば、それはそのまま、「読者」の不在につながろう。では、ＡＩ文学の台頭が引き起こした一連の問題、

とりわけ作品の登場人物の身分、また作者・読者の身分に関する問題に対して、文学倫理学批評は「人類文明三段階論」の視座から、新たな思考の地平を切り開くことができるだろうか。

四、ＡＩ時代における「倫理身分」への再思考

文学倫理学批評の「人類文明三段階論」は、人間社会の発展を、自然選択から倫理選択へ、そして最終的に科学選択（scientific selection）[6]に至るプロセスだと考えている[7]。科学選択の段階が人類文明の発展の最終段階とされているとはいえ、目下、人類が必ず倫理選択の段階を終え、科学選択の段階に移行できるという保証はどこにもない。なぜなら、本格的な科学選択の段階に入る前に、倫理に支配される「前科学選択」(pre-scientific selection)の段階（人類が今いる段階）を、人類は経過する必要があるからである。

前科学選択の段階と倫理選択の段階との違いを示す事柄としては、ＡＩがますます人間の世界に対する認識、あるいは世界を変革できる実践活動に関与するようになったことが挙げられる。ＡＩ文学は、文学が前科学選択の段階まで発展してきた後の、必然的な産物だと言える。ＡＩ時代に生きる文学者たちの考えるべきことは、伝統的な文学とＡＩ文学の境界線をいかに強調することではなく、また伝統的な文学概念や文学理論のみに依拠して、ＡＩ文学を分析することでもない。文学倫理学批評は、特定の倫理的環境と倫理的文脈の中で文学を分析することを強調し[8]、ＡＩ時代の文学批評に適用可能な理論体系と言説体系を構築すべきだと主張している。登場人物、作者、読者の身分に関する認識を改めることは、その第一歩である。

まず、ＡＩ時代の文学作品における登場人物の身分の問題は、依然として倫理的諸問題を引き起こす主な原因であり、身分の問題の解明は、そのままＡＩ時代の文学理解につながる。前科学選択の段階では、人類はこれまでのどの段階よりも、文学を必要としているはずである。なぜかというと、実生活では経験していないが将来的には必ず直面することになる倫理的問題、科学技術が人間に与える影響や科学技術との共生問題などを考えるために、人類は文学の無限な可能性を用いて、倫理的経験を得る必要があるからである。そこから考えると、科学技術が社会・個人に与える影響を描くＳＦ文学は、ＡＩ時代の文学の担い手になるだろう。ＳＦ文学の登場人物を身分で分類すると、「倫理的な人間」(ethical people)[9]と「科学的な人間」(scientific people)[10]との二種類に分けられる。前者は有性生殖に依存して子孫を残すことが多いが、後者は科学的な基準に基づき、科学技術（たとえば遺伝子技術）を用いて人間を複製・創造することが多い。また、「科学によって改造された倫理的な人間」と「倫理的意識を植え付けられた科学的な人間」などのタイプも存在する。科学的な人間の一部が「機械」であっても、科学技術の進歩（生物学上の「進化」ではない）によって人間の形を獲得できるため、形式上では人間と見なすこともできる。彼らの多くは人間社会に存在している（生きている）ため、倫理身分を獲得する可能性

を潜めている。聶珍釗は、「文学テクストにおいて、倫理的な問題はすべて倫理身分に関連している」[11]と述べているが、ＡＩ時代のＳＦ文学に現れる〈身分〉が引き起こした問題には、次のようなものが挙げられる。①「科学的な人間」は人間か、②「倫理的な人間」と「科学的な人間」のどちらが世界を支配することになるか、③「倫理的な人間」と「科学的な人間」との間に起こる倫理的混乱（世代をまたがる近親相姦など）、④「倫理的な人間」と「科学的な人間」の身分の境界線の曖昧さによる混乱、である。

次に、ＡＩ時代における作者の身分は、作者が人間の知性を持っているかどうかで判断されるのではなく、作者の創作または生成される文学が、文学の教育的機能を果たせるかどうかで判断されるべきである。AI時代の文学は、概ね「伝統的文学」と「ＡＩ文学」との二種類に分けられ、作者も「伝統的な意味での作者」と「ＡＩ文学の作者」の二種類に分類できる。「伝統的な意味での作者」とは、生活の体験、素材の収集や知識の学習などを通じて、文学を創作する人々のことである。「ＡＩ文学の作者」とは、命ある人間ではなく、AIGC（Artificial Intelligence Generated Content）の言語モデルのことである。大規模なデータセットの事前学習とその後の微調整を通じて、AIGC は自然言語をインテリジェントに処理する能力を持つようになり、様々なタイプの文学的テキストを、あたかも人間が書いたように生成できる。AIGC を作者とするこの見解は、人間と機械（AIGC）の境界線を曖昧にするという懸念から、疑問視され批判の的とされがちである。だが、「人間と機械の境界線が完全に崩れて、機械はより人間に近く、人間はより機械に近くなったように見える」[12]この時代において、文学の創作方法の更新は、文学研究者が作者の身分に関する認識を更新することに直接つながっていよう。「人間中心主義」を強調することで、「人間と機械の戦い」における人類の勝利を確かなものにしようとする試みは、果たして成功できるだろうか。AIGC が伝統的な意味での作者に取って代わることは、本質的には AIGC が伝統的な意味での作者に代わって、文学を創作する機能を果たすということであり、人間の機能が機械に移行することを意味しているにほかならない。前科学選択の段階においても、文学の基本的な機能は依然として教誨であろう。その意味では、人間作者であろうと、機械作者であろうと、創作・生成された文学が文学の基本的機能を果たすことさえできれば、作者としての身分を有すると見るべきかもしれない。

「伝統的な意味での作者」と「ＡＩ文学の作者」（AIGC）のほかに、「AIGC の機能を部分的に利用して創作を行う作者」と、「AIGC の機能だけで創作を行う作者」も存在している。前者は、人間の創作機能を部分的に機械に譲った場合を指しており、AIGC によって創作されたテキストの割合が、人間が創作したテキストの割合を上回らない限り、「作者」の身分を有するのは依然として人間のほうである。後者は、AIGC そのものではなく AIGC の利用者のことを指している。AIGC の利用者によって、生成されるテキストは異なってくるが、作成可能なテキ

ストは、すべてAIGCが予め用意したものに基づいている。この場合、人間がAIGCのテキストをコマンドで視覚化したに過ぎず、作者としての身分を持たないと見るべきだろう。

最後に、ＡＩ文学には「暗黙の読者」が存在していることを指摘しなければならない。ＡＩ時代の読者は、文学を生成する者・読み手・批評家という三重の身分を持つことが可能である。一九八〇年代、ヴォルフガング・イーザー（Wolfgang Iser）は「暗黙の読者」（implied reader）という概念を提唱し、テキストにおける作者と読者の潜在的な対話、つまり作者は常に読み手を想定しながら創作していることを強調している。AIGCによる文学創作も同じである。生成されたテキストが読者の期待に応えるように、AIGCは予め、特定の既成ジャンルに基づいて設定・訓練されてある。テーマ、ジャンル、スタイル、時代などさまざまなキーワードを使うことで、詩モデル、小説モデル、戯曲モデルだけでなく、屈原モデル、李白モデル、シェイクスピアモデルなど多様なAIGCモデルが作れるのが、その具体例である。そうすると、ＡＩ文学の「読者」は創作の初期段階から存在し、読者の身分も創作の初期段階から形成されたことになる。なお、伝統的な文学にある「暗黙の読者」はＡＩ文学のそれと異なる。前者は、作者の創作活動の発展に伴って変化し、場合によっては破壊される可能性もあるのに対して、後者は特殊な事態がない限り変化しない。さらに、ＡＩ時代の読者は読書の仕方によって、「伝統的な読み方をする読者」と「AIGCを利用して読む読者」とに分けられる。ＡＩ技術の発展と普及に伴い、より多くの人々がAIGCにアクセスでき、個人的なニーズに応じて文学をカスタマイズして読書できるようになるだろう。注意すべきなのは、カスタマイズされた文学を、創造された文学と同一視すべきではないことである。ＡＩ技術を使って文学を生成する読者は単なる生成者であり、文学の作者ではないからである

そのほか、読者には、少数のプロの読者すなわち批評家も含まれている。彼らはAIGC文学批評モデルを用いて文学作品の規則、パターン、構造を分析し、ビッグデータ検索における文学の「遠読」（distant reading）を行うことができる。

五、まとめ

本論は、「人類文明三段階論」における最も重要な用語である「倫理身分」と、それを日本のＳＦ文学研究に用いる可能性について考察を加えた。人類の自己探求の源流は、古代ギリシャのデルフィにあるアポロン神殿にまで遡ることができる。そこには「汝自身を知れ」（know yourself）という意味深い格言が刻まれており、人間が自己を真に理解しなければ世界を理解することができないことを示唆している。文学倫理学批評も、「自己理解」の重要性を強調している。文学倫理学批評は倫理身分を中心としつつ、倫理環境、倫理タブー、倫理選択といった用語を垂直方向に、身分構築や身分脱構築などの用語を水平方向に置くことによって、立体的な理論的枠組みを構築することを

目指している。また、文学倫理学批評は、今までの文学理論が、AI時代における文学創作に追いついていないという現状を鋭く捉えている。ＡＩ時代の作家・読者と登場人物の倫理身分に着目し、科学的原理と技術的な分析手法を導入することで、文学倫理学批評は、ＡＩ時代にも適用可能な文学批評の理論体系と言説体系の構築に努めている。

周知のように、日本文学史上の代表的な作品には、多かれ少なかれ倫理的[13]な要素が含まれている。これは、文学倫理学批評を用いて日本文学を分析することの可能性を示唆している。特に、敗戦からの復興、冷戦、社会主義の崩壊や景気の変化を描く日本ＳＦ文学は、倫理的な次元から掘り下げられるという可能性を孕んでいる。今、心臓移植や脳死など、日々進歩している技術に倫理面での議論が遅れている場合多く、ＳＦ文学を倫理的な角度から議論することは、ある意味、未来に備えるケースメソッドだと言えよう。

科学技術の急速な発展に伴い、日本ＳＦ文学はさらなる発展を得るのではないかと思われる。「倫理身分」にフォーカスして、登場人物の行動を理解する従来の研究方法は、文学作品を研究する際に、やはり有効的な手段ではある。しかし、現代の遺伝子技術、人工知能、ヒューマンマシンインターフェース（HMI）、認知神経、インターネット、デジタル経済、携帯端末、量子通信などの要素が、文学作品およびその創作の重要な一部になるにつれ、登場人物だけでなく、作者・読者の身分まで曖昧なものになってしまう傾向が著しい。そのため、科学に基づく学際的研究にシフトしていくことが求められているのではないだろうか。ＡＩ技術の飛躍的な進歩に伴い、「人とは何か」「作者とは何か」「読者とは何か」など、一連の問題を見直さなければならなくなるだろう。中国の学術研究界では、文学倫理学批評のチームをはじめとする研究者たちは、それに関連する研究実践を進めている。上述の諸問題は人類共通の問題でもあるため、この問題の解決に、より多くの日本人学者に加わっていただければ光栄である。

【注記】

1 「倫理批評」と「文学倫理学批評」との区別は、詳細は Yang Gexin, *From Ethical Criticism to Ethical Literary Criticism: The Dilemma and Way — Out of American Ethical Criticism*, Journal of Shanghai Normal University (Philosophy & Social Sciences Edition), vol.48, no.1, 2019, pp.50-57 を参照。

2 「倫理選択」は二つの意味を持ち、中国語ではすべて「倫理選択」と呼ばれている（英語では「ethical selection」と「ethical choice」である）。「ethical selection」は「natural selection」に対応する概念であり、類人猿が人の形を獲得した後に経験し、人間の本質を獲得するための選択の全段階を指す。社会であれ個人であれ、倫理選択の段階を通過しなければならない。社会の面で言うと、新しい種として獣類から独立した人類は蒙昧の段階、つまり倫理選択の段階に入る。人類の面で言うと、人が生まれてから死ぬまで、命の各段階は倫理的選択（ethical selection）過程であり、この過程は無数の ethical choices によって構成されている。文学倫理学批評の理論では、人類文明は自然選択（natural selection）、倫理選択（ethical selection）

および科学選択（scientific selection）の三段階からなっている。詳細は、Nie Zhenzhao, *Introduction to Ethical Literary Criticism*（London: Routledge, 2023, pp.186-93）を参照されたい。

3 「自然選択」は、猿から人間へという形式上の選択である。人類文明の発展過程において、人類が直面している最大の問題は、自らを獣から区別して身分を選択することである。この問題は、人類の進化とともに自然発生したものだ。19世紀の半ば、ダーウィンは生物進化論を唱え、自然選択の概念で生物界全体の発生・発展を科学的に説明している。進化論の観点で人類を考察すると、人類の文明は、人類の自己選択の結果であることがわかる。これまでの文明の歴史では、人類はすでに自己選択を二回、完成したのである。猿から人間へと進化する過程で人類が最初に行った選択、つまり自然選択は、生物的な選択に過ぎない。この選択の最大の意義は、直立歩行が可能な脚、道具を扱う手、科学的に配置された五感や四肢など、〈人間〉としての形を獲得した人類は、外形上で獣と区別できるようになったことである。しかし、この選択は、人間がどのように生まれたのかという問題に、物質的な意味での答えを出しただけであり、人間とは何かという問題、すなわち人間と他の動物との本質的な区別を根本的に解決してはいない。では、人間は自然選択を終えた後、どのように自分と獣を根本的に区別できたのだろうか。これは、人間の倫理的選択によって実現される。人間は初めて、生物的な意味での自然選択をした後、二回目の選択すなわち倫理選択を経験した。人類の社会が経験した〈自然選択→倫理選択→科学選択〉という過程は、人類文明の発展の論理でもある。人間の自然選択は、人間が次の段階へと進化するための基礎を築く生物学的な選択である。人間の知性は自然選択によって獲得されるが、理性は倫理選択によって獲得される。詳細は、聶珍釗『文学倫理学批評導論』（北京大学出版社、二〇一四年、第二八〇～二八一頁）を参照されたい。

4 詳細は、Gao Xinmin and Luo Yanchao, "The Ethical Turn of Personal Identity Research and the Return of Human Life"（Social Science Research, no.6, 2022, pp.127-34）を参照されたい。

5 「スフィンクス・ファクター」「ヒューマン・ファクター」「アニマル・ファクター」については、Nie Zhenzhao, *Introduction to Ethical Literary Criticism*（London: Routledge, 2023, pp.196-199）を参照されたい。

6 「科学選択」は人類文明が倫理的選択を経験した後に経験した、あるいはこれから経験すると予想される段階である。人類文明の発展の過程において、自然選択は〈人〉という形式の問題を解決し、形式から人を獣と区別できるようにした。科学選択は、前科学選択の段階と科学選択の段階に分けられる。前科学選択の段階は、倫理選択が科学選択に入る前の段階である。この段階は、本格的な科学選択の段階ではなく、倫理選択の段階から科学選択の段階に入る前、あるいは倫理選択と科学選択が混在している初級段階である。科学選択は、倫理選択が完全に終わった後の段階である。前科学選択の段階に関しては、次の四点が諸家の関心を寄せている。①人が科学をどのように発展させ、利用するか、②科学技術と倫理選択の軋轢、④科学がどのように人に影響を与え、人を改造するか、④科学がどのように人を支配する存在になるか、である。科学選択の段階についても、同じく四つの問題が注目されている。①技術のカテゴリーで科学者を分類すること、②科学技術が科学者に賦与する価値、③科学者と倫理選択の伝統、④科学選択の時代の規則、である。詳

細は、聶珍釗『文学倫理学批評導論』（北京大学出版社、二〇一四年、第二五一～二五二頁）を参照されたい。

7 詳細は、*Yang Gexin, From Ethical Selection to Scientific Selection: The Theoretical Logic of Ethical Literary Criticism*,（Interdisciplinary Studies of Literature, vol.6, no.3, 2022, p.417）を参照されたい。

8 詳細は、Nie Zhenzhao, *Introduction to Ethical Literary Criticism*（London: Routledge, 2023, p.6）を参照されたい。

9 「倫理的な人間」については、Nie Zhenzhao and Wang Songlin ed. *A Study on the Theory of Ethical Literary Criticism*（Beijing: Peking UP, 2020, p.18）を参照されたい。

10 「科学的な人間」とは、クローン人間、バイオニック、ロボットなどの技術によって作り出された新しい生命体のことである。

11 Nie Zhenzhao, *Introduction to Ethical Literary Criticism*, London: Routledge, 2023, p.195

12 Yang, *Gexin. From Ethical Selection to Scientific Selection: The Theoretical Logic of Ethical Literary Criticism*, Interdisciplinary Studies of Literature, vol.6, no.3, 2022, pp.423

13 文学倫理学批評での「倫理」は主に、文学作品中の道徳的行動に基づいて出来上がった抽象的な道徳規範を意味し、道徳的行動と非道徳的行動を表現するために用いられる場合もある。倫理は抽象的な道徳の価値判断および評価を主としており、一般的には、すでにある程度確立され、かつ人々が認めて遵守している集団的・社会的な道徳規範もしくは基準を指す。倫理は道徳に対する理論的帰納と要約であり、個人の道徳を集団化、社会化させるものである。倫理は道徳の抽象化と理論化であり、集団的・社会的立場および理性の面から道徳を要約し説明する。これは、人間関係や秩序への評価に基づいており、個人の行動のみか、集団的・社会的道徳に対しても抽象的な道徳的評価を下す。また、倫理は道徳的評価の延長でもあり、道徳的評価の理性的認識と抽象的要約、換言すると道徳の理か理論と理解することができる。倫理は、道徳哲学とも呼ばれている。道徳原則、道徳規範、道徳基準および集団・社会的道徳などは、すべて倫理の範疇に属している。ただし、道徳そのものは倫理と異なる。道徳は善そのもので悪と反対な概念であり、我々が普段、道徳と呼んでいるものからは悪が排除されている。そのため、人が善を捨てて悪に走るとき、たちまち不道徳あるいは非倫理的と見なされる。一方、倫理は善と悪の両方を研究するものであり、善悪を区別することで勧善懲悪の目的を達成しようとする。要するに、倫理とは、善悪に対する人間の価値判断にほかならない。倫理が道徳と異なるのもこの理由である。

【付記】

本論文は、2021-2022年度中国浙江省高校重大人文社科攻关計画項目「文学倫理学批評の学際的な言説システム構築――脳テクスト理論に基づく」（2023QN071）、中国国家社科基金重大プロジェクト「当代西方倫理批評文献の整理・翻訳・研究」（19ZDA292）の助成によるものである。

文学倫理学批評については、すべて聶珍釗『文学倫理学批評導論』（北京大学出版社、二〇一四年）を参照したものである。なお、本稿における英文、中国語文献の翻訳は、すべて引用者による。

（中国・浙江大学外国語学院副研究員）